

---

雪

谷山沙羅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雪

### 【Nコード】

N6793K

### 【作者名】

谷山沙羅

### 【あらすじ】

窓の外をじつと眺め、今日も退屈していたひより。

寂しい1人の病室。寝台は3つも余っているのに誰も入ってこないなんて……。

でも、ある日理樹と云う名の男の子がひよりと同じ部屋で過ごすことになった。

その男の子は不思議な事を言い出す少年だった。

## 1話 「始まり」

なんて憂鬱な午後だろうか・・・

今日は天気も悪く、寝台の上で寝たきりなのも飽きた。

晴れていたら、外を散歩したのに・・・。

そんなことを考えていたひよりは、いつものように窓の外を眺めている。

誰もいない1人の病室。退屈すぎる。

ガラガラガラ・・・

病室のドアが開いた。検温の時間にしては、ちょっと早かったかな。

「・・・5分早いです・・・よ?」

ひよりは窓の外を見ていた目を看護師の方へ向けた。

でも、そこにいたのは看護師だけではなかった。

同じ年くらいの男の子。看護師さんに背中を押されて病室へはいつてきた。

「はい、ここに寝てね・・・何かあったらこれで呼ぶのよ・・・」

ああ、やっぱり・・・雨の激しさは増している。

空が光る。音がとどろく。やっぱり今日は外に出られそうにない。

「ひよりちゃん。あの子ね、新しくここへ来たのね。」

仲良くしてあげてね。 あっ、検温の時間ね。 「

今日も特に熱はなく・・・さっきのあの子はとなりのベットで寝ている・・・。

こちらをちらちらと伺っているのがよくわかる。

ひよりはずっと窓の外を眺めているのだけど。

「君は知ってる・・・？もうすぐ雪が降るよ。」

今はまだ5月。雪が降るのは冬である。  
すでに雨は降っているのだけど。

「ひよりちゃん。僕は君に言ってるんだよ。」

ひよりの名を呼ぶ男の子は自慢げにつぶやいた。  
思わずひよりは後ろを振り返った。

「やっとこっちを向いてくれたね・・・ずっと前から知っていたよ。」

男の子はそういってベッドから立ち上がる。  
こちらへとゆっくり向かってくる。  
ひよりの手を握り締めて・・・

「あの・・・貴方は誰ですか・・・？」

「僕は貴女を見張りに来ました。」

ひよりは目を丸くした。見張り・・・？  
監視・・・？男の子はこくりと頷いてもう一度強くひよりの手を握った。

「僕の名前は理樹って言うんだ。とりあえず・・・よろしくね！」

「あ・・・私はひよりです。宜しくお願ひします。」

2人はすぐに仲良くなり、毎日よく話すようになった。

## 2話 「二人」

今日は晴れ。足の自由がうまく利かないひよりは理樹に車いすを押されながら庭園へと向かうのだった。

「足が動かないなんて大変だよね。」

「そつでもない。」

ゆっくりゆっくり・・・いつも2人は一緒。同じ部屋だから仕方ない。

「理樹はどうして病院にいるの？」

「君は見ての通りだからね・・・僕は生れ持ちの喘息の発作が激しくて・・・。」

理樹はきつとすぐに退院してしまうことだろう。

喘息だったらすぐに病院を抜け出せる。そう友達がいつていた。そうなると退屈になってしまうね。今以上に。

「でも、僕は退院する気はないんだ。というのも、いつもすぐ退院してもつれもどされちゃってさ・・・もう嫌なんだよね。」

「そつか・・・でもすぐに退院するんでしょ？」

「・・・どうかな」

やっと庭へ着いた。今日はあまり人はいないみたいだ。

日向ぼっこにはちょうどいいだろう。

「戻ったら昼御飯だね。」

「病院食見たいにまずいもの・・・食べられないな。」

ひよりはうつむきそう言った。

理樹はひよりの姿を見て、ちょっと気にかかった。

「だめだよ！ご飯は食べなきゃ。ちゃんとね。」

よく見たら、ひよりの体はかなり痩せ細っていた。

きつとずっと食べていなかったのだと思う。

というか、今まではくばく食べる様子なんて・・・

「私ね、足が悪いんじゃないの。ものが思うように食べられないんだよね。それで力が足に入らなくて・・・」

ひよりはそう言つと理樹を見上げる。

「戻ろうか・・・」

濁ったような空気。理樹はその場から立ち去ろうとした。

とりあえず病室へ戻れば空気も変わるだろうから・・・

また車いすを押しながら戻る。

この庭は結構せまい。だけど植物は沢山で、色とりどりの花が生えている。

「赤い花は嫌いかな。」

ひよりはそう言った。でも理樹は何も答えなかった。  
今のはひとりごとだったかもしれない。

「……でも、ピンクは好きかな。」

病室へ昼食が運ばれてきた。  
2人は少しずつまんだ。

「ね、どう……？やっぱりまずい？」

「ううん……おいしいよ。本当はね……」

理樹はひよりの事が気にかかる。  
だって、自分じゃ何もできません。やりませんというようなオーラ  
が……  
首を振ると理樹は箸を置いた。

「しゅちそうさま。」



### 3話 「明日」

6月の中旬に入り、すっかり梅雨モード。空が笑う日なんて珍しい。

2人の会話も曇ったままだった。

ひよりはまた窓の外を見ている。ひよりは息をしない人形のようだ。

長い髪に、すらりとしたからだ。

くつきりとし、大人びた顔つき。本当の作り物のよう。

理樹は退屈していた。2人の間の会話もとぎれとぎれ。

どうやらひよりの体調はそれほどいい訳ではないようだから。

食べたものはすぐもどすし、体を起こすのも苦しそう。

手をさしのでても、その手を握ろうとはしなかったから。

病室を1人で抜け出す。

目の前には長い長い廊下が伸びる……。

誰も歩いている感じはない。そりゃそうだろう。

どこかの漫画やアニメは結構通行人がいるが、病院の廊下にそうそう歩いている人はいないだろう。

「あ、あなたは理樹くんだったよね……?」

看護師さんがこちらへやってくる。

理樹の肩に手をかけた。

「最近ひよりちゃん体調悪いんでしょう?心配にならない……?」

理樹は最初は合わせていた視線を自らそらした。

「いえ、それなりには……」

「うんうん。そうよね。そういえば明日はひよりちゃんのお誕生日なのよね。元気に誕生日を迎えられるといいけど……。」

理樹は少しひきつった顔で言った。

「そうですね……。」

だってひよりの話を自分にされたってどう答えたらいいか……。でも明日が誕生日ならば何か用意せねば……。

「そっだ……。」

#### 4話 「雨」

病院の庭へとやってきた。本当は雨が降っている日に子供は外へ出られない事とされている。でもしょうがないんだ。元気になってくれるなら。

「あつた・・・！」

理樹はさつと何かをつかむと、他にはないかとずっと庭をうろつろしていた。

小さな体に滴る雫はそれだけ冷たいものだろう。

6月とはいえ、やっぱりまだ寒い。少しだけ。

「あと・・・これもいるかな。」

その時だった。誰かがこちらへ向かってくるではないか。

「こら！どうして外にいるの・・・？」

理樹は走りだした。看護師さんに見つかってしまったのだ。

今右手に握ってるものがバレたらきつと怒られるし、部屋へ連れ戻されてしまう・・・！？

雨は激しさを増していく。冷たい冷たい。

とりあえず大きな木の陰に逃げ込んだ。

看護師さんも気づいてはいないから、近い方のドアからだ気づかれないだろう。

それに入ればすぐエレベーターがある。

なんとかバレずにエレベーターに乗り、元いた自分の病室まで戻った。

びしょびしょの体。ひよりは・・・寝ていた。  
少し顔色が良くなったようだ。よかったよかった。

「ふうー・・・」

理樹はびしょびしょになった服を脱いだ。

そして、さっき捨てたものをベッドの横の引き出しへ入れた。

「濡らした方がいいかな・・・？」

ティッシュペーパーを取り、ぬらし、それも一緒にしまった。

「明日はいい日になりますよね・・・。」

そう呟き、理樹は服を着がえる。

雨は少しずつやんできたかもしれない。

## 5話 「発熱」

「いただきます。」

朝食の時間。ひよりは回復したかのように体を軽々起こすとぱくぱくとモノを口にほおり込んだ。

「元気になったの・・・？」

ひよりはこちらを向いて。につこりと笑った。言葉は何もなかったけれど、理樹には解った。

『元気だよ。』

そう聞こえた。空耳にすぎないけれど。

「ああー・・・なんだかなあ。。。。」

頭が鈍く痛いし、体が少し重たかった。ずっと体が寝台の上にあるんだからそれも仕方がない事。

「やっぱり食べれないや・・・気持ち悪い。。。。」

ひよりは箸を置いた。飲み物で口の中のものを流し込んだ。しばらくずっと自分の残した食べ物を眺めていたが、病室の扉が開いた。

「検温の時間ですよ。」

「36.6ですね。次は理樹君ね。」

わきに挟んだら、結構早い時間ではかれる体温計。  
最近の体温計にもう懐かしい温度計のようなものはない。  
病院だとだいたいこんな感じだろう。

「あらら・・・37.8あります。熱ですね。」

看護師はぼんと手をたたいた。  
そして少し恐い顔をした。

「昨日雨にぬれてたからよお！あの後すぐに着替えなかったんでし  
よ？」

さんざん叱られ、ぺこぺここと理樹は頭を下げた。

最後には「しょうがないわね」と看護師さんが布団をかけてくれた。  
けれど、彼女が病室から出るとその布団を勢いよく蹴った。

「はぁ・・・ね、ひよりちゃん。プレゼントがあるよ。」

## 6話 「花瓶」

「寝てたら。熱あるんでしょ。」

ひよりはそっけない冷たい態度を取った。

そんなのお構いなし。だっているここの子はこうなのだからね。

「はいっ。お誕生日おめでとう。」

すこしフラフラとした足取りで、昨日雨に打たれながらつんできた花をひよりに渡した。

ひよりは少しびっくりした顔をしたが、それをさっと受け取った。

「ありがとう。でも、寝てなよ。」

ひよりの頬は少しピンク色に染まった。

車いすに乗り、花瓶を抱えて病室から出て行った。

理樹はまたフラフラと自分のベッドに戻り、目をつぶった。

「よかったんだよね。これで。」

するとすぐにひよりが返ってきた。

水が入った花瓶の中にさっき理樹からもらった花をいけてやった。

そしてベットへ自力で這い上がると、いつもとは違う方を向いて話しかけた。

「ピンク、覚えててくれたんだ。」

「……もちろんだよ。」

目を閉じたまま理樹は答えた。

ふふつとひよりは鼻で笑った。今日が晴れていてよかった。

またあとで庭へ行こう。そしてひよりはいつものように目を窓の外へ向けた。

「……おやすみなさい」

理樹に優しく囁いた。



## 7話 「三人」

2人とも体調は回復し、いつものようにダラダラと長いだけの時間が過ぎて行った。

最近ではやることも尽きてしまった。

2人でできる遊びなんてトランプとかあやとりとか・・・

毎日やっては飽きてしまうものばかり。

すると病室の扉が前のようにガラガラと音をたてて開いた。

入ってきたのは荷物を抱えた女の子。

さっさとあいていたベッドへと足を運んだ。

ひよりのベッドと向かい合わせ。女の子は一言もなく黙々とものを直し始めた。

「こんにちはっ、私は稚奈って言います・・・？」

最初は明るい口調で話していたが、窓の外しか見ていないひよりに見て音がさがっていく。

稚奈という名の女の子は視線を下へと落とした。

「こんにちはー、僕は理樹だよ。よろしくね。」

なんとか理樹がそれをカバーしたかのように・・・稚奈は上を向き、にっこりと笑いかけた。優しいな頬笑み、短い髪ながらも丁寧にくくっていた。

そしてカーテンをガラガラとしめるとごそごそと着替えだした。

「御着替えします。話はその後ですよ。」

ひよりはずっと窓の外を見つめている。

窓からは病院の入り口が見える。その姿を理樹が見つめる。何も言わないひよりの態度が気にかかったのだ。

「終わりです。おしゃべりしませんかぁ・・・？」

喋り方がゆっくり、そしてふわふわとした動き、きつとこの少女は癒し系だろう。

ピンクの寝巻を身にまとい、のそのそと理樹の寝台へと寄ってきた。

「理樹君だっけ・・・？何歳なのー？」

「えへへっ、僕は12だよ。」

2人の会話が耳に響く。さっき無視したせいで少し話すのが気まずい。

何も言いだせなくなってしまった。でもひよりはずっと窓の外を見つめている。

まるで誰かを待っているようだ。

「じゃあ私よりお兄さんですね！私は11ですよ。今年で12・・・」

「そうだねえ。1歳年下でもこんなに可愛いものなんだね。」

ひよりはベッドへ顔を伏せた。何故だか胸が苦しいのだ。

でも息はできるし、ちゃんと動ける。なぜか胸だけが・・・

助けを求めるほどでもないこの痛みはどこからやってきたものなのだろう。

「理樹君ってA型でしょう？雰囲気わかるもーん。」

「稚奈ちゃんは・・・B型かな？」

「いいえー、私はこう見えてもO型。」

ひよりの胸はだんだんあつくなってくる・・・。

不思議な気持ちだった。なんだろうか。かなり新鮮。すると稚奈がひそひそと理樹に話しかけた。

「・・・あの、とても言い出しにくいのですが、あちらの彼女は・・・」

「ああ、なんだろうね。人見知りなんだよきつと」

「・・・そうですか、私も自分から話しかけるのは・・・。ちょっと」

「僕には普通に話してたじやない。」

後は夜食までゆっくりするだけ。

ずっとぼんやりとする頭の中、ひよりは考えていた。

このはち切れそうな不思議な気持ちは何なのだろう。でも、そんなことより外の方がかなり気になる。

「それは、理樹くんが話しかけてくれたからですよあ。」

「そっかそっか。」

理樹はまるで妹のように稚奈の頭をそつとなでてみた。小柄で猫みたいでなんとなくじゃれてみたくなった。

結構ノリもよさそうだし・・・面白そうかな。

「稚奈は猫みたいだね。」

「よく言われます。でも、猫より犬の方が好きなんですけどね。」

ひよりは少し向こうが気になった。

いつもは正直煩い位喋ってくれた理樹が今日はおの子になつていてる・・・。

私はこのまま、暇なまま過ごさなきゃいけないのかな。

1人でそう考えると、ひよりは哀しくなってきた。

「ねえ、あの子と仲良くなりたい？」

理樹は小さな声で稚奈に聞いた。

そっと顔をうずめて、こう言った。

「できれば・・・向こうが嫌なら、それでいいんです。」

理樹はにっこりと笑うと優しく呼んだ。

「ひよりちゃん、紹介するよ。」

## 8話 「一人」

ひよりは自分の居場所がイマイチつかめなかった。なので目線は窓の外。それでも理樹はしゃべり続ける。

「稚奈ちゃん。1歳年下だって。仲良くしてあげようよ!ね?」

「ええ。そうしましょう。」

「う……。」

稚奈は向うを向いたひよりが自分の事を避けているのだ。そう悟った。

私の事が気に入らないんだ。きっと年下が苦手なんだろう。

「ち、稚奈です!よろしく……です。」

「私はひより。」

稚奈は小さなため息をついた。きつとひよりには聞こえていなかっただろうけど、近くにいた理樹にはしっかりと聞こえた。

「……じゃあ、トランプでもしよっか。そこに座って。」

稚奈は部屋の真ん中にぺたんと座った。すこし幼く見える。そして理樹は寝台から立ち上がるとひよりの方へと向かった。稚奈はその姿を見て思った。2人はとても仲がいいんだね。と

「何します?私、準備しよきます。」

「カードをくってて。」

理樹はそっとひよりへ手を差し伸べた。  
でもひよりはその手を振り払った。

「一人で起き上がれるよ。」

ゆっくりと立ち上がり、フラフラと歩きながらも部屋の中心へ着いた。  
ちよっと理樹はさびしかった。

## 9話 「腕」

「じゃあ私から引きますねっ！」

理樹の持つカードを稚奈が引く。

ひよりの持つカードを理樹が引く。

稚奈の持つカードをひよりが引く。

3人の中に会話はなかったけれど、稚奈はずっと笑っていた。

「私のあがりですね！」

ばばぬきは稚奈が最初にあがり、最後は理樹だった。

そのほかにも色々とトランプで遊んでいたが、そろそろ夕食の時間。

「さ、そろそろ自分のベッドへ」

理樹はもう一度ひよりへ手を差し出した。

でもひよりは向うをむき、やはり1人で立ち上がった。

またフラフラと・・・でも向かうのは誰も寝てないベッド・・・

「手かすよ・・・？大丈夫・・・？」

「いいんだよ。」

愛想のない奴だな。なんて思いながらも心配そうな目で見ていた。ひよりの体はグラリと傾いた体がとっさに動く・・・

「つ・・・。」

後ろから両手でひよりと床との衝突を守った・・・はず。理樹の腕が、こんな自分をしっかりと守ってくれたのだ。ひよりは俯いている・・・。悪い事をした気分だ。でも、すぐ後ろから拍手が聞こえてきた。

「すごいです・・・ひよりさん、大丈夫でしたか!？」

稚奈も心配して駆け寄ってきてくれた。

「ごめんね、大丈夫。私、どうかしてたみたい・・・」

改めてヨロシクね、稚奈ちゃん。」

稚奈はにこりと笑った。3人ともにつこりと。

でも、本当にひよりは心を開いたわけではない。

そんなつもりは全くない。

でも、こうしてないといつか自分は1人になってしまうのではないか、そう不安だっただけ。



## 10話 「散歩」

「大丈夫ですか？」

心配してくれる稚奈の声が聞こえる。

あれから数日後、ひよりは体調を崩し、熱が急に上がった。

「だるいですよね・・・何か持ってきてきましようか？」

稚奈は部屋を飛び出て、飲み物を持ってきてくれた。

こうしてそばで見ってくれる人がいると落ち着く。

稚奈の方が自分よりよっぽど大人っぽいのではないか。ひよりはそう思った。

「すぐよくなりますよお！どこかの患者さんから菌を貰ったかもしれませんねえ。ふふふ」

稚奈はにこりと笑うと小さな声で囁いてくれた。

「何かあったらいつでも言うてください。」

自分のベッドへさっさと戻って行った。

ひよりはやっぱり窓の外をのぞく。

こんなときでさえ・・・いえ、それはただのわがままでしかないのですから。

「あ、おはようございます！やっとお目覚めですか？」

理樹に稚奈が話しかける。理樹はにこにここと笑いながら喋っている。

できれば2人の会話に混ぜて欲しいけど、いまはそんな元気が無い。

「大丈夫？ひよりちゃん。」

「大丈夫」

「そーですよー私が付いてますから!」

そんなに自分は情けなかったかと少し笑いたい気分になった。

でも、今こんな空気で・・・その気持ちはその空気と一緒に飲みこんだ。

「元気はそれなりにあるみたいですよ。体はだるいそうですが。」

「そっか・・・あとで散歩行こうよ。みんなでさ」

賛成。理樹と稚奈は2人でひよりを車いすに乗せ、庭へと向かった。

## 11話 「階段」

次の日、もっと熱が上がり、もう喋るのもしんどい。偶にくるこつという風邪、誰もが経験したことあると思う。

「無理しなくていいですからね。」

今日も稚奈が様子をつかがってくれている。なんて心強いだろう・・・  
自分が何もできないときに、少しでも気を使ってくれるというのはうれしい事である。でも、今日は昨日と少し様子は違った。

「頑張ってくださいね。」

そう言うと、すたすたと病室から出て行ってしまった。ひよりには解っていた。前から悟っていた事だったけど、あの2人は自分のいないところで仲良くしている。あの2人の中にははいつちゃいけないような気がしてならない。この気持ち発熱によるだるさ、気持ち悪さを倍にする。

「どうしてだろう・・・どうして1人なんだろう。」

ひよりは無理やり体を起こした。

今日は雨だ。ちょうどいい。

車いすに乗り、廊下の端へ行った。

そして思いつきり勢いをつけて直行。とても気持ちがいい。

そつだ。ふとひよりは思いついた。

ここを勢いよく曲がればもっと楽しい事になる。

さて、それでは再び廊下の端から端へ・・・

ちょうど雨なので廊下も湿り、いつもより滑りやすくなっている。  
誰もいないのを確認してから出発・・・  
右手も左手も、痛くなるほど速く回した。  
勢いよく曲がった。でも、その先は・・・

ガシャン！

その先は、階段だった。

階段をころころと転がり落ちた。

その後、なんだか急に眠たくなった。

まっくら・・・もう夜なのかもしれない。

「おやすみなさい・・・」

## 12話 「手紙」

「ねえ……ねえってば!」

目を覚ますと、そこは見慣れた天井。

病室の中だ。よく見ると、自分の腕は理樹が握っていた。

「どうして……どうして階段へ突っ込んだんだよ!僕、あんなに止めたのに。」

「止めた……?」

よくよく見れば、理樹の顔は今までの顔より怖い顔をしていた。

「僕は止めたのに、何かつぶやいて……聞いてなかったのか!？」

「……ごめんなさい、覚えてない。」

「ふざけるな!」

理樹が急にどなった。

稚奈は自分のベッドで顔をうずめている。

理樹の様子がおかしいのがわかったかのよう。

「どうしてそんなことを……どうして!?!ねえ、何かあるんなら……」

「よけいなお世話。うるさいよ。」

回りの空気は一瞬にして凍りついた。

稚奈はすくりと立ち上がり、部屋から立ち去った。行けない雰囲気だと幼いながら悟ったに違いない。

「私には居場所が無いから。苦しいから。」

「・・・そうか、居場所から逃げてるもんね。」

「へ・・・?」

激しい口論はまだまだ続く。

理樹は握っていたひよりの手を振りはたいた。

「そんなに稚奈が気に入らないの?」

「・・・別に」

本当は稚奈の事を気に行つてはいなかった。

最初から嫌いだった。でも向こうは私の事を思ってくれている。どうやってそれに答えたらいいかがひよりには解らなかった。

「差別するなんて酷すぎるよ!勝手にしてる。」

理樹は自分の寝台に座るとカーテンを閉めた。

ひよりは解った。きっと理樹は怒っている。

理樹はもう私をどうでもいいと思ってるんだ。

そして理樹は・・・それだけは絶対に嫌だ。なんとかして・・・ひよりの頭の中で沢山の物事がごちゃごちゃと混じる。

ピンと浮かんだので体をのそのそと起こし、メモ帳になにかじのじのと書き始めた。

「理樹へ

ごめんなさい。私が悪かったです。

稚奈ちゃ

「

いきずまった。この先がどうしても書けない。

ひよりの右手がそれを拒む。でも、書かないといままでの退屈な生活に戻ってしまう・・・それもいやだった。

紙はくしゃくしゃに丸めて捨てた。

また窓の外を見た。やっぱりあの人は来ないのだね。

### 13話 「涙」

いつのまにかひよりは寝てしまったようだった。  
ひよりはさっきの事は忘れていた。

「あれ？どうしてカーテンしめて・・・あっ・・・。」

カーテンを開けて思い出した。そうだ。理樹と自分はけんかしたんだった。と

寝台の上に理樹の姿はなかった。でも、紙切れが1枚置いてあった。そこに書いてあった文字は簡単な言葉だった。たった5文字の簡単な言葉。

「さようなら」

それを見てひよりはキュウンとなった。

今まで近くにいた理樹が自分の前からいなくなったのだ。  
そのときひよりは解った。私は・・・

「理樹の事が好きだったんだ・・・」

急に涙があふれてきた。こらえてもこらえても大粒の涙はこぼれてくる。

こんなに空は晴れているのに。

大声では泣けない。でも、大声で泣きたい気分。

「泣きたいのに・・・泣けない・・・。」

涙はちゃんと流れているのに、ひよりはそんなことに気づいていな



かった。

理樹はどこへいったのだろうか・・・。

気がつけば稚奈の姿も消えていた。そんなのひどいよ。

私1人を残して・・・でもこれも自分のせいだ。

ひよりは唇をかみしめ、こぶしを握りしつかりと立った。

理樹のベッドにはたん。

理樹の匂いがする。優しいにおい。懐かしい気がする。

もう一度嗅ぎたい匂いだよ。

「ごめんなさい・・・そう言えばよかった。」

2日たつても2日たつても1週間たつても理樹の姿はなかった。

どうしてだろう、もう会えないかもしれない。

暇で暇で仕方ないけれど、ひよりは1人窓の外を見る。

ここのところ全然食べ物を口にしてなかったから痩せ細り、かなりつらい。

食べなかったのではない。食事に温かみが無かった。

1人の食事はいくら温めたってすぐにさめてしまう。

そのことをひよりは知った。

「気分転換・・・」

細くなった腕で無理やり体を支え、車いすに乗る。

前は少しくらい歩けていたのに、食事をあまりとらなくなった今、立つこともままならない。

哀しくなる、さびしくなる、恐くなるけど病院の庭は落ち着く。

病院の庭へと向かう。

いつもは理樹が押してくれていた。

でも1人だけとなるとコントロールが難しく、とても動けたもんじ

やない。

廊下、人が多くてなかなか進めない。どうしてだろう。いつもは人なんていないのに。

「っ……」

ひよりは視線の先に懐かしい影を見つけた。

「り……あ……!？」

理樹の姿。その姿を呼ぼうと思った時だった。稚奈が居た。理樹におぶられた稚奈が。

「……」

ぽかんとその場に座っていた。しばらくずっと。

2人は平気でひよりの横を通り過ぎて行った。

悔しい。どうして、そうだ。さっきごめんねと言えばよかったのだ。もう嫌だ。寝たい眠たい。何もしたくなくなってきた

## 14話 「崩壊」

気付くとそこはさっきの廊下。

あんなに人が歩いていたのに・・・どうしてこんなところに1人な  
んだらう。

不思議な事に、足の裏に冷たい感触を感じる。しっかりと。

ちゃんと自分の足でひよりは立っていたのだ。

床が冷たいのがこの季節にしては不自然だが・・・暗い病棟。

なんとなくここから抜け出さなければ取り返しをつかない事になる  
ような気がした。これもよく解らないけれど・・・。

とにかく走った。久しぶりだ。自分の足で走る事なんか。

とりあえず玄関へ出たのだ。

そしたらそこは・・・回りの建物がくしゃくしゃになった場所だっ  
た。

病院の前には小さな保育所があった。その隣には知らない家。

赤い家の屋根の家はどこへいったの？

あの公園の遊具はなかったはず。どうしてあんなに曲がっているの  
か。

そして、たった1つだけ背の高い病院が恐ろしい。

もういやだこんな世界は。

ひよりは1人四つん這いになった。でも次の瞬間顔をあげた。

ゴゴゴ・・・

さっきまで自分が居た病院までがしゃがしゃと崩れだした。

まずい。ここには危ないと誰も悟り、きつとみんな逃げ出して  
しまったんだ。

私、たった1人を置いて・・・。

すると、さつき崩れたばかりの病院はビデオを巻き戻したかのようにぐるぐると回りくねって元に戻った。

そんなバカな事が起こるはずもなく。きっと夢なんだ。あり得ない。

よく見れば、他のたてもものも綺麗に元通りではありませんか。

その光景はカオスすぎて自分が何なのかよくわからないのです。

誰かが後ろ歩きで戻ってくるはず。

向うの道路がまっぴたつに割れる。

なんだかかなり自分が小さくなった気分。

回りの世界が大きい。歪んで見える。立っていられないくらい……  
よってしまっただかもしれない。

15話 「病棟」

自分の体が倒れて気がついた。

「あれ・・・？」

ここは病室。目の前にいたのは稚奈だった。

「どうしたんですか、ひよりさん。廊下で一人で寝ちゃうだなんて・・・。」

「夢だったんだ・・・やっぱり・・・。」

ひよりは窓の外を見ながらいう。

稚奈はくすりと笑いかけた。

「どうしたんです？いつもあんな感じのひよりさんが・・・。」

「変な夢を見た。意味のわからない奴を。」

稚奈はさっとひよりの手を握るとやさしく体を起してくれた。

「そういう時は、お外の空気を吸うんですよ。そしたら気持ちが晴れてすっきりするんです！。」

稚奈はひよりを優しく車いすに乗せると、前誰かがやってくれたように押してくれた。

あの人よりゆっくり、ちょっと気持ちが早まってしまっけれど・・・。

「御庭へ行きたかったんでしょう・・・？それにしてもとても静かな廊下ですよねぇ！」

「あっ・・・」

ひよりは悟った。闇の中なのか・・・ここは・・・。ちよっとさびしくてひんやりしてて・・・なんだろう。さっきまで・・・そうだった、そうなのだ。

「だめ、ここはだめ・・・早くここから出なきゃ・・・！」

「へ・・・？」

「早く！早くう！！出なきゃだめなの！お願いだから！」

稚奈のような若い女の子が、中学生を乗せた車いすを押しながら走るのは少しきついもの・・・でも静かに崩れたのだ。なんの前触れもなく・・・この病院は・・・！

「っ・・・！」

「あっ！待ってくださいあいー！」

ひよりは稚奈の腕を握るとフラフラと走り出した。全然早くはないが、今はこれが精一杯なのだから。

## 16話 「保育所」

とりあえず病棟の外に出てきた。

ひよりはその場に立ち尽くした……。

「やだ……うそ……どうして……？」

目の前には保育所がもうすでに崩れていた。

そんな……やっぱり静かに崩れてゆくのか。

ひよりはボロボロと大粒の涙を流した。

「どつどーしたんですか！？ひよりさん！」

稚奈はとても心配している……。

ひよりは両手であふれ出る涙をぬぐいながら言った。

「私の……思い出の……大事な……保育園……！」

「え……？」

昔、ひよりはまだ親が全然仕事なんて出来なかったころ。

ここである1つの約束をしたのだった。

「今度は此处で会うからな。」

そう言うのはひよりの父親。もう家族のもとへはいられない。

出張のつもりが向こうの会社で大変気に入れ、無理矢理転勤することになった。

でも3人で暮らせる大きな家を買うのにもお金がかかる。

父親は家族を養うために孤独という道を選んだのだ。

「ひよりの保育所の前なのね。」

ひよりも父親も本当は離れ離れに暮らすなんて考えられたもんじやない。

本当はいつまでも3人で仲良くいたいのに……。

「長い間別れて暮らすけど、大丈夫だよな？だってパパもママもひよりも……みんな家族なんだから。」

「うんつ。でも、大人になってこの保育園無くなったらあー？」

「その時はもう会えないかもな。ははははっー。」

この会話を最後に、父親とは会っていない。

ゴゴゴゴゴ……赤い屋根の家が大きな音をたてて崩れ落ちた。

「人が……下敷きにはなってないんでしょうか……!?!？」



## 17話 「心」

「そんなこと……。」

稚奈とひよりは駆けつけた……誰もいない……大丈夫そうだが、振り返ると無音で後ろの病院がボロボロになっていた。

「……なんで？」

ひよりは目を丸くした。

こんな時、こんな時……理樹もいてくれたら助かるのに。稚奈なら何かを知っているかもしれない。

「ねえ、理樹は何処なの……？」

「理樹……？誰ですか？それ。」

ひよりはその場に座り込んだ。その目は……これまでにないくらい鋭かった。

そして急に立ち上がると稚奈の腕をグツとつかんだ。

「嘘つけ！私があんたのせいだとだけ……どれだけ……うっ……うっ……」

言いかけて泣き崩れた。

だって、こんなに稚奈を攻めたって自分のもとへ理樹が帰るわけない。

理樹が許してくれる事は無いのだから。

稚奈はきよとんとして混乱しているようだ。

「あの・・・私・・・なにか・・・？」

理樹の存在を知る者はこの世で今はひよりだけなのかもしれない。そこらへんを歩く人も、隣の部屋の病人も、理樹をしかつた看護婦さんもみんな理恵の事を知らないと言おう。どうしてなのか。

「どうして・・・？戻ってきてよ・・・！」

周りの建物がその叫び声とともにごろごろ、ぼろぼろと雪崩れて行った。

何故だろう。まるでこの町はひよりの心を映しているようだ。

切なくて、寂しくて、ぐしゃぐしゃして・・・

## 最終話 「雪」

ひんやりと周りの空気が冷えた。  
さっきまではあんなに暑かったくせに・・・

上空から白いものが舞ってきた。  
白くて冷たくて・・・ちよっと早い。早すぎる。  
おとぼけさんなのだね。

「天使の羽だ・・・！」

「なっ・・・どうして・・・？」

ひよりは天使の羽だと喜び、稚奈は何故こんな季節に雪が降るのか  
わからなかった。

後ろから何かの影が近寄ってくる・・・ゆっくりと。  
そして、ソレは2人の手を握りしめた。

「理樹・・・。」

「・・・思い出した、そうか・・・」

稚奈は理恵の顔を見つめた。じっくりと。  
やっぱりそうだ。さっきまで自分の忘れていたものだった。  
自分はずっと隣で見っていたのだ。ずっとひよりと理恵の事を。

「っ・・・」

「ひよりちゃん・・・！」

ひよりはその場に崩れた。さっきの建物の様に音も無く……。  
稚奈には解っていた。前からずっと……。この2人の間には何があるのかちゃんと。

ひよりは一方的に理樹を好きでいたが、理樹はそんな気持ちでは無かった……。だって。

「大丈夫……。？ひよりちゃん……。」

理樹が抱き抱え、体をゆすつてみた。けれど、ひよりは目を閉じたまま動かなかった。

理樹の目からは細い一筋の涙が垂れ落ちた。

「冷え切ってます……。ひよりさん……。」

稚奈がひよりの頬に手を当ててみる。やはり冷たい。  
雪が降るのに薄着をしていたからだ。

そして理樹の表情は曇っているのか晴れているのか曖昧だった。

「さようなら、お母さん……。みんな……。」

僕はもう行かなきゃ……。ひよりちゃんの事は頼んだよ……。稚奈ちゃんも、さようなら。」

理恵はすくりと立ち上がった。

たくさんの雪が理恵を包みだした。

「僕がちゃんと一緒に居ればこんなことも無かったんだ。

ごめん、稚奈ちゃん。彼女の怒りは……。色々とボロボロにしちゃったね。。。」

「あの・・・やっぱり理樹君はひよりさんの・・・」

云い終わらないうちに風が吹き、ぐるぐると宙を舞う雪たち。綺麗だけれど、切ない感じ。でもずっと眺めていたかった。

雪が散っていくと思うと・・・周りには誰もいない。たった一人になっていた。

この白い虚無の中で、稚奈は一人、独りでうずくまった。眠っているひよりの体を抱きよせて・・・。

## 最終話 「雪」(後書き)

こんな面白くない小説を最後まで読んでくださってありがとうございました。

こんなに長いのを描いたのは初めてで……。

色々解らないところが出てきたと思います。

わざと解りにくく描くところは描きました。

解釈は自由です。

本当にありがとうございました。

よかったらアドバイスや感想をお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6793k/>

---

雪

2010年10月11日11時10分発行